



房總古代道研究会会誌

房總古代道研究(一)

2016年発行

# 上総国府の国衙は『市原』にあり

山越 国臣

はじめに

県史の謎のひとつになって上総国府跡の所在地。律令の時代。政治、経済、文化の中心だった国府。国分僧寺・尼寺跡が市原市の市役所近くにあるのだから、その周辺にあったのは確かだ。「上総国府」はまぼろしか。筆者は考古学の専門家ではない。文献史学にも詳しくない。国府推定地を何度も訪ね歩く現場主義の郷土史家。こつこつと調べた結果、おぼろげながら国府が姿を見せ始めた。諸国の国府は域内の四隅に神社が祀られている事例が多い。この点に注目し、地図上の社寺配置から謎の上総国府を探るという方法をとった。自由な立場から歴史地理学的に、併せて発掘事例など考古学の成果を加味して大胆に推理した。古代道研究会ということで地域の小径(道)からも痕跡を追った。この結果、浮上したのが「市原地区」。最近の発掘確認調査でも注目されている。国府は計画的、綿密に設計・建設された古代都市だったように思う。小径(道)の追跡からも浮かび上がった。現在の推定地は市原説、門前・郡本説、村上説、能満説の四説。この稿では、市原説を中心に論説する。

## 市原の守護神

国府探しは、文献1の明治初期の市原地区地割図(図1)がヒントになった。変哲のない地割図だが、まず周辺の神社の配置が気になった。台地の北西方向の位置には万葉集に登場する阿須波神社(A)、北東方向に日笠宮神社(B)、南西方向に八幡地区の飯香岡八幡宮の元宮といわれている市原八幡神社(C)が立地する。何か気になる神社配置だ。南東方向には神社はない。字名で「天王崎」があるので、等間隔で仮として「天王様(八坂神社)」「(D)」を置いた。すると平行四辺形が描かれた。これらの神社を

対角線で結んだ交点(図1のa地点)周辺を注意深く観察した。



図1 明治初期の市原地区地割り復元図(文献1)

地割りの方向が東西南北、南北方向に整然としていて、周りの地割り方向とは異なっている。上総国府の国庁が脳裏に浮かんだ。東西ラインの場合には建物遺構が南面するため重要な施設の可能性が高い。市原地区は神社に守られている。神社を結んでできる平行四辺形は「上総国府」の国衙域を守る結果ではないのかという思いが強くなった。市原市埋蔵文化財調査センター元所長の田所真氏も、自身がまとめた「市原の神社と柳楯神事」の中で「市原地区の台地全体の中で眺めてみると、村の四隅を取り囲むよう

な位置に鎮座していて、決して不規則に置かれていたのではないことに気づく。中略…市原地区の神社はこの辺りをお守りするよう鎮座している」(市原市郡本周辺の遺跡と文化財)と指摘している。その他に、同地区内には椿森と呼ばれている小祠が三か所あり、これも謎に包まれている。

社寺配置から読み解く

市原地区が神社に守護されているとは地図上から読み解けた。それでは仏閣ではどうだろうか。上総国分寺と同范の古代瓦や独特の凸面布目瓦が採集さ

れた光善寺(光善寺廃寺遺跡)。この寺院も上総国府跡の解明に、一つの手がかりになりそうだ。市販の地図資料に、光善寺(1)を起点に真南に線を落とした。古代寺院跡(千草山廃寺(2))と想定される千草山遺跡に行き着く。千草山廃寺と国分寺(僧寺(3))を結ぶ。その線上に国分尼寺(4)が乗った。光善寺—千草山廃寺—国分寺。見事な二等辺三角形を描いた(図2)。



図2 光善寺・千草山廃寺・国分寺トライアングル

次にとった行動は、市販の三二〇〇〇分の一の市原市都市図を購入。地図上に載る神社をすべてチェックし、神社と神社を線で結んだ。多くの神

社が縦、横、斜めと線上に並んだ。この結果、郡本地区は郡本八幡神社(E)を中心に約五町域(五四〇坪)、能満地区は府中日吉神社(G)を中心に、やはり五町域の空白地帯が生まれた。一体、この事実は何を意味するのだろうか。現地調査を試みた。郡本地区は、南西域に郡本八幡神社、北東域に稻荷神社(F)があった。能満地区は南西域に府中日吉神社、北西域に天王様(H)が確認された。南東域には、第六天(J)という祠が「昔あった」ことを地区の古者から証言を得た。

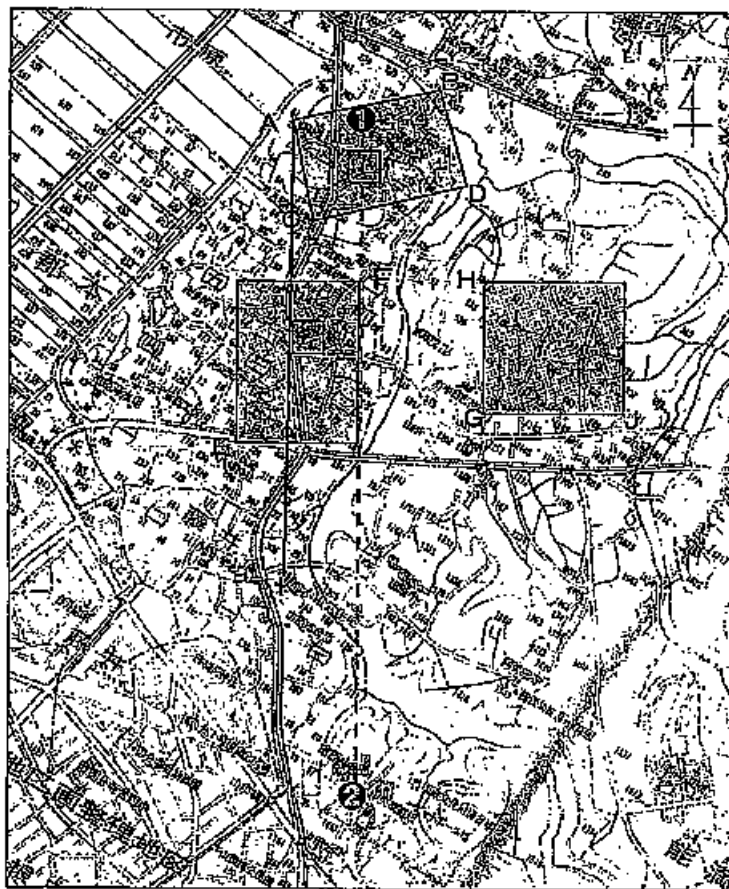


図3 郡本地区・能満地区の推定結界域

この事実から読み取れることは、上総国府は五町域程度の国衙域をもっていたのではないということ。台地上には五町域の平たん面は取れない。結界として、家の普請の地鎮祭のような区切りのような境界が設けられたのではないかと筆者は考えている。ちなみに、市原地区の阿須波神社と藤

井地区にあった大宮大権現(区)を結ぶ南北の線。山田橋地区で検出された古代官道が消えた地点にぶつかると。郡本地区のスポットが国衙域とするならば、その中心を通ることになり、郡本人幡神社前の藤井地区から郡本地区の谷津に向けて、なだらかに下る傾斜地は「朱雀道(南道)」だったのではないか。大宮大権現があったとされる付近には「大門」と呼ばれている民家がある。

地図上から読み取れることは、他にもある。上総国府は古甲・古光の字名がある郡本・門前地区から市原地区に。その後(中世)に府中を冠する神社がある能満地区に移ったと想定される。筆者は、上総国府(国衙)移転説をとりたい。広義としての国府は能満地区を含めての市原台地上に国庁、正倉、工房など行政施設が展開された。その時々々に国衙域が移転したとみている。初期国衙(郡本・門前地区)は阿須波神社―大宮大権現ライン。中期国衙(市原地区)は光善寺―千草山麁寺(遺跡)ラインが、それぞれ中軸線となっている。

#### 七四一年の国分寺建立の詔

では、上総国府はどうだったのか。想像を広げてみたい。まず初めに郡本・門前地区に国衙が存在した。本格的に律令制が始まり、国・郡・里が整えられた8世紀初頭に十五郡からなる国府があった。七一八年に上総国から安房国四郡が分立する。ところが、七四一年の国分寺建立の詔が、上総国に問題を生じさせた。詔は「(風水的に)よい場所に建てよ。俗的な場所でなく、ひなびたところでない所(国府郊外に)」と指定している。上総国の為政者の困った顔が想像される。上総では、要望(詔)に応えられないような場所がない。本来は、市原郡の本貫地とされる北寄りの菊間地区に白羽の矢が立った。だが、残念なことに土地が狭すぎて断念せざるを得なかった。次に、風水的によい能満地区。国の重要施設、拠点があった。さらに東に求めると田舎になってしまう。最後に決断したのは南方向の、現

在の国分僧・尼寺(跡)がある惣社地区。その時、惣社地区周辺は、東日本では最古とされる神門古墳群、「王賜」銘鉄剣が出土した稻荷台一号墳群と古墳が多数存在して、市原台地の南面は奥津城(墓所)として聖域化していたと考えられる。聖域を破壊する。現代でも頭を悩ませる問題だ。さて、どう対処したか。国衙(役所)の移転である。その時に、国衙が郡本・門前地区から市原地区に移ったと、筆者は考える。国分寺の建設と新たな国づくりが同時進行で行われた。七四一年十二月。安房国が上総国へ併合された事実が物語っているような気がする。上総国は大国。遠の朝廷(とおのみかど)としての威厳を見せなければならぬ。それには資材(石材など)が乏しい。多数の人も必要になる。それには、分立独立した安房国を併合して、人材や石材、木材などの資材を調達せざるを得なかった。安房は、七五七年に上総国から再び分立して独立の道を歩む。その時までには、上総国の新たな国づくりと国分二寺の整備が終わったのではないか。このことは、阿須波神社境内に建つ、万葉歌碑の「庭中の阿須波の神に小柴さし 吾は斎はむ 帰り来まで」(万葉集巻三〇・四三五〇番)の歌とも整合する。七五五年が万葉集の防人歌採収の最後。阿須波神社は庭中(国衙)の北西城となる。この章で述べてきたのは、自由人の想像を最大限に広げた推定論にすぎない。安房国は、上総国から分立―併合―分立―独立を繰り返したと歴史は伝える。だが、なぜそうだったのか。いまのところ、その理由を述べた論評は目にしていない。

#### 謎の溝跡遺構検出

「国衙域の外郭線か?」。今年(平成二十八年)三月、市原市門前地先(市原地区)で幅約三メートル、深さ約一メートルの溝跡遺構が検出された(写真)。十一月現在までに、公表(報告書)されていないが、筆者が現地取材し発掘担当者から聞いた概要を記したい。住宅建設に伴う市原城遺跡関連の緊急確認調査だった。調査面積は、約一六〇〇平方メートル。調査の結果、近くの市

原八幡神社を起点にすると、南西―北東方向に北軸に対して斜めに走っていることが確認された(図4の④)。溝の下方幅は、およそ二メートル。いわゆる逆台形で「葉研箱型」と、担当者は説明した。溝跡遺構は連続ではなく、切れ目が確認された。国衙域への出入り口か? 筆者がコンパスで確認したが、切れ目部分は真南を示した。このことから、筆者が想定した上総国衙の外郭線と合致するのではないかと感じた。市原台地の北端は崖線が連なり、自然要害化。想像だが、溝は周囲全体ではなく、せい弱部分だけに掘られているとみている。

平成五年二月、古甲の地名が残る郡本地区の東西方向に走る畑地で溝跡遺構が検出された(写真2・文献2)。幅八メートル、深さ約二メートルの大溝だった。一時は「上総国府政庁跡か」と、関係者は色めき立った。だが、三〇年近く経った現在でも溝跡遺構はなぞのまま。古甲地区の大溝は、その大きさから察するところ、郡本地区(郡本三丁目)の崖線の延長としての区画溝と考える。多分、溝跡は東方向の崖線まで延びているはずだ。

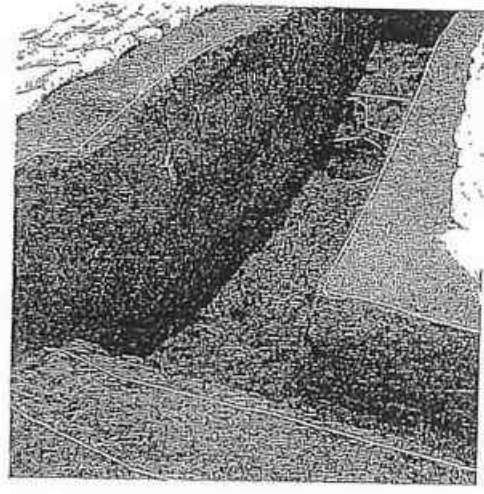


写真2 古甲地区溝跡遺構 (文献2)

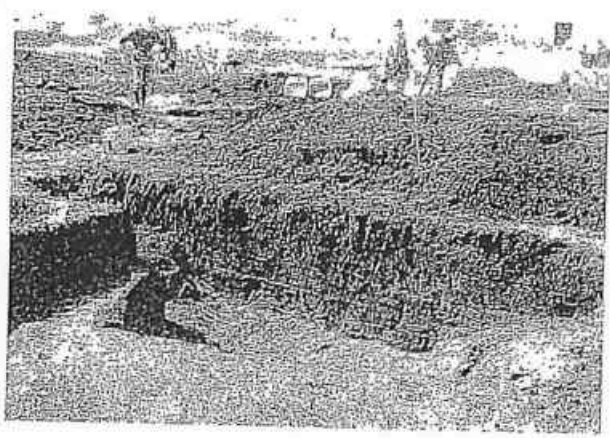


写真1 市原地区溝跡遺構

その北側の門前地区(字名で竹ノ内)に、この大溝に守られた重要な施設があったのではないかと推察する。一方、今回検出された市原地区の遺構は、古甲の遺構より小規模だが、図1の平行四辺形の線上に位置している。国衙域を守る役目を担う。さらに国道二九七号線に沿って走る地割りは、この下に国庁域を守る溝跡が眠っているのではという想像を膨らませてくれる。地割りが区画溝と想定すると、「上総国府」は重郭構造となる。いずれにしても、古甲地区と市原地区の溝跡遺構は上総国府を探る重要な手がかりだ。

浮かび上がった上総国府(国衙)

市原地区の北軸に延びる国道二九七号は南北方向の内郭(溝跡)の可能性が高い。東西方向は、元消防団詰所(図4のb地点)前の能満方向に走る市道が内郭線。検出された溝跡遺構(外郭線か)に近い。内郭と外郭が想定できた。後は国庁探し。一〇〇メートル四方の国庁域を想定した方眼紙を、地図上で動かした。びたりと当てはめることができた(図4)。国道二九七号の消防団詰所前から斜めに北東方向に斜めに走る小径(市道)は国庁南門に通じる古代道でなかったか。西門、東門も小径の延びか

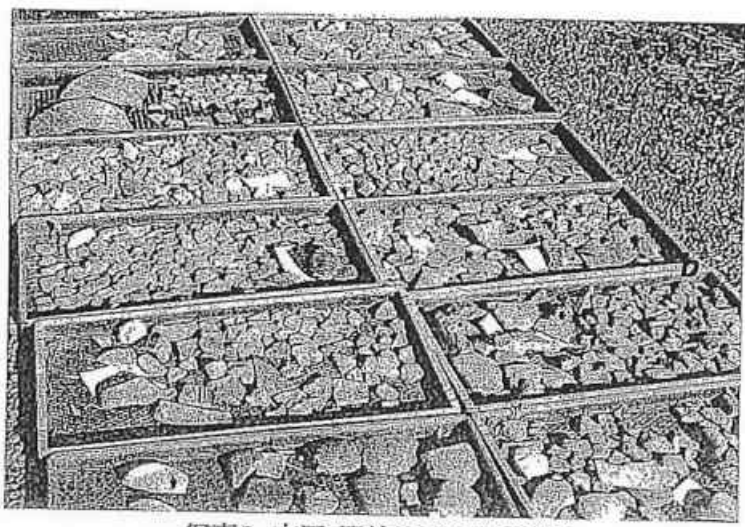


写真3 市原・門前地区の表探遺物

ら想定できる。

同地区内では、これまでの発掘調査で

①海岸部から台地上に続く古代官道が辻地区でも検出された(文献3)

②市原市内で一番大きな柱穴遺構が辻地区で検出された(文献4)

③同じ場所に建て替えられた形跡がうかがえる掘立柱建物が検出された

(文献5)

④前出の溝跡遺構が検出された(外郭か)

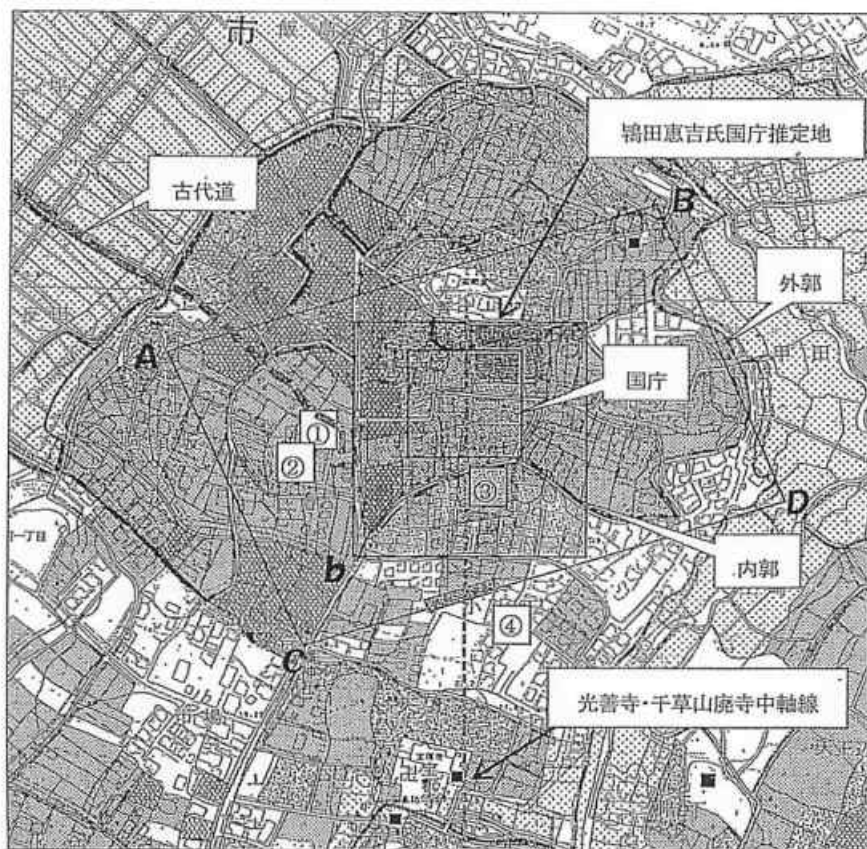


図4 市原地区の国府・国衙推定図

考古学的見地からも関連する事象が最近相次いで明らかになっている。

地区周辺からの表採遺物も多彩だ(写真3参照)。筆者が民家や畑地などから表採した遺物は優に一万点を超える。重圓紋軒丸瓦、布目瓦、瓦磚、緑釉、灰釉、須恵器、土師器、金クソ(鉄滓)など。中には、古代役人の必須アイテムだった円面硯(えんめんけん)の一部が見つかっている。表採遺物の一部は市原市埋蔵文化財調査センターに収蔵されている。表採遺物の鑑定は同センター元所長の田所真氏にお願いした。

こうした点からみても上総国府(国衙)は市原地区にあったと確信している。まぼろしの国府。今後、住宅の建て替えなどで確認調査が行われ、考古学の見地からも上総国府の全容が明らかになる日は近いだろう。

おわりに

謎の上総国府にふれたのは、およそ三〇年前の新聞記者時代だった。稲荷台一号墳で「王賜」銘鉄剣の確認報道がされた直後。市原市では、市役所周辺で国分寺台区画整理事業が急ピッチで進められていた。市役所周辺の台地上は埋蔵文化財の宝庫で、次々と国分寺跡や古墳、貝塚跡が明らかにされた。しかし、上総国府(国衙・国庁跡)は発見できなかった。国府の存在が否定され、惣社説も消えた。市原市教育委員会が平成元年度からスタートさせた「上総国府所在地確認の調査」も、間もなく三〇年を迎えようとしている。姿を見せ始めているが、いまだに解明されていない「上総国府」。筆者が思うに、国分寺跡に近い「惣社」という地名に惑わされすぎているのかもしれない。中世ごろか。時の為政者のかけたトリックにまんまとはまってしまった気がする。人市場という字名が門前地区にある(図3の左下)。人の売り買い市場。おどろおどろしい名前だ。だが、市原市の歴史に詳しい宮本敬一氏は「一日市場(ひといちば)」ではなかったかとみている。上総国で、一番早く開かれる市場。市の立つ広場があった。「市原」の語源、由来ではないかと思っている。現代でもトリックは、かけられて

いる。「更級通り」、「更級何丁目」といった名称・地名。後世の人たちが歴史を振り返った場合に、五井駅東口周辺が古代の都と思ってしまうかも知れない。もう少し早く、中原市の市名の由来になった「市原」に原点回歸していれば見つかった。「市原」は市内に残る唯一の字名だから。紙敷の關係でふれることができなかったが、市原地区（国衙推定地）の東側を流れる能満川、西側の条里制水田を南北に貫く用水路は「運河」的役割を担っていたのではなからうか。

（市原里づくりの会会長）

【参照文献】

- ・文献1 市原市教育委員会 1999 『上総国府推定地歴史地理学的調査報告書』
- ・文献2 市原市文化財センター年報 1992 「郡本遺跡群古甲遺跡 上総国府推定地確認調査」
- ・文献3 市原市教育委員会 2013 「市原城跡第2地点」『平成24年度市原市内遺跡調査報告書』
- ・文献4 市原市教育委員会 2011 「市原城跡辻地区」『平成22年度市原市内遺跡調査報告書』
- ・文献5 市原市教育委員会 2013 「市原城跡門前地区」『平成24年度市原市内遺跡調査報告書』

・その他参考文献

- 木下 良 「国府 その変遷を主にして」 歴史新書 教育社
- 須田 勉・阿久津久編 「東国の古代官衙」 高志書院
- 齋藤 忠 「仏教考古学と文字資料」 雄山閣

「市原市能満周辺の遺跡と文化財」 市原市地方史研究連絡協議会  
「市原市郡本周辺の遺跡と文化財」 市原市地方史研究連絡協議会  
「市原市八幡地区の遺跡と文化財」 市原市地方史研究連絡協議会

